
月 刊

MéLange

Vol.118



2016.11.20

詩と評論

月刊「Mélange」

Vol.118 2016.11.20

「月刊めらんじゅ」編集部

詩 & 俳句

帰還詠② (俳句) ……………岩脇リーベル豊美 06
 戯長歌 ……………野口裕 07
 サンタの顔 ……………北岡武司 08
 ふき／予告 ……………中嶋康雄 09
 ひさしぶりに百を切った晴れの日 ……………中堂けいこ 10
 しだく ……………大橋愛由等 11
 影や暗闇や…そんなんぱっかり／ビスナール ……………福田知子 12
 べつしょ。べつ。しょ。 ……………高谷和幸 13
 半島の 突端の 町で……………木澤豊 13
 一日の理由 (ルバイヤート風) ……………大西隆志 14
 城 ……………富 哲世 15

第19回口ルカ詩祭・書き下ろし朗読詩②
 改正神聖受胎祝福禁止法案摘要……………千田草介 03
 あにみたす 声のための ver.20160820……………安西佐有理 04
 のなら……………大橋愛由等 05

連載エッセイ & 詩評

神戸詞あしび 107「夢とうつつの区分 溶解している不安」……………大橋愛由等 16

編集部だより★37/11月の読書会は、数学研究者で、短歌・俳句作家である北村虻曳氏に、スピーカーをお願いした。テーマは、「数学って何だ・・・数学における有用性と美意識・・・」。面白い話になりそうです。／夏から長期入院している詩友・富哲世氏に、友人たちが見舞いをしています。わたしはまだ行けていないのですが、その代わりといっちは不遜ですが、見舞いを兼ねて、ハガキ通信を出しています。「うたの光景／富哲世氏へ」と題をつけ、なにかの作品や声を引用して、それをわたしなりに解釈するというものです。例えば二回目の通信に取り上げた声は「かー」。これは2016年10月20日に京都 BUTOH 館でひとり舞踏公演「緋色」を演じる今貂子が唯一発した言葉です。その声を舞踏の身体論と大地とのからみで、フラメンコと結びつけたのです。このハガキ通信、まだ続きます。(大橋記)

◆ 改正神聖受胎祝福 禁止法案摘要

千田草介

海苔巻きの外側をくるみ込む
 アスファルトに頬ずりするアトンの神の
 不機嫌もたらした黒い粘液の溜まりに
 農林8号の苗を植えつける黄色い鼠たちが
 尻端折りをして
 あはあはあはあはと
 断末魔とも呱呱の声とも放屁ともつかぬ合唱
 をしつつ
 まつさらな空にむかって
 大いなる早天の無慈悲を呪う
 その彼岸から銀河をよこぎって架かる
 トレッシェル鉄橋の上のびた
 よじれて錆びた廃線軌道を
 紀元前に走った四頭立て戦車の
 車軸の音がひびきわたり
 急患の往診に向かう町医者
 みずから御者となつて鞭をふるい
 白衣をひらめかせるも
 三人の博士が乗った逆走するワゴン車と
 相対速度百五十キロで激突し
 微塵に四散して落下した
 その現場には
 観音経を詠む声が殷々と
 軍靴の響きのごとく規則正しく
 シーラカンスを模した魚板を叩く音と
 町立中学校のチャイムが和し

古生代の水面から頭をもたげた甲殻類が
 融通無碍の演算を
 赤い心臓を点滅させて
 即席麵のできる時間で
 生命の生死に適用する
 大いなるかな生
 大いなるかな死
 おや牧師
 西へ行きますか
 東から来る者となるために
 いかにも
 わたしは来たる世には道になろう
 女人に踏まれるのを悦ぶためでも
 隠しどころを見上げて楽しむためでもない
 ただ道になりたいからなる
 コールタールのげつぷが
 福音が途切れてしまうから
 舗装道路になるのは必定だ
 うれしそよにとびはねる者ばかりでなく
 血まみれになつて息絶える者もある
 痰や反吐も甘んじて受けねばならぬ
 おやありがたい言葉を読もうとしたら
 これは薬の効能書きではないか
 薬の中身はどこにあるかと
 目線をさまよわせ
 聞き耳をたてれば
 ウグイスが律儀に教えてくれるか
 カラスが嘲り笑うか
 盗まれた聖人像が乞食をしてあらわれるという
 三条大橋の下で
 救難の手旗信号を振りつつ
 マクワウリマクワウリ
 と声をかけてまわると
 首をおとされた刑死人の行列が

声をたてることもできずに
 ただ仕草だけ念仏踊りの狂騒の輪をつくる
 ただ物音だけのドタバタドタバタ
 手足があれば箭を掘るぐらいはできようと
 西遊旅行社の旗をかざして西の山をめざせば
 敵は本能寺にあり
 と叫ぶ集団とすれちがう
 ここはどこかと迷つて気づけば
 南蛮寺門前
 六道の辻から
 殉教者たちも行き倒れも八部衆にまじつて
 チーフアンパイアのジャッジを受けるためか
 ダイヤモンドをぐるぐる回りにくる
 そのさまは渦状銀河の構造にさも似たり
 これはペビーユニバースなんですと
 車いすの聖人が電光啓示してくれる
 最後の預言者は
 いつでもどこにでも現れる
 ほんとうは前も後もない
 円環の時間のなかに
 来世は前世として
 用意されているのだから
 神は鳥以外に何も飛ばない軍用滑走路の端に
 たたずんで煙草を吸っている
 殺しにいくか
 殺されにいくか
 考え煮詰まった頭では
 どちらも変わりはないように思えてしまうと
 政府専用機の墜落で
 民びとが大いに救われるシナリオを書く
 生真面目な語り部が
 涙ながらに首を振る
 断頭台は
 すぐそこだ

安西佐有理

ここにいたのは、だあれ
 いちにちじゅう、西日がさしこみそうな二階
 おおよそは空のブリキの函と
 半透明のプラスチックの衣裳ケースがおかれた
 したしい、しらない部屋
 洋服だんすのハンガーで
 肩先のまるい、いつだかの背広
 ゆったりとわすれかけたワンピースが
 たたずんでいるすきまに
 平屋の一階にある階段の下
 よくかたづけいたうすあかりの食卓が見えました

この家でも、サイダーのあきびんが
 黄色いケースにならんで、近所の酒屋から
 とどけられています
 えんぴつと万年筆で書いた残暑見舞いのはがきは
 その手前の煙草屋のかどのポストへ
 出しにいくところだし
 白い食器棚の把手に、赤と白の水玉もめんでつくった
 きつとあなたによく似てきまじめなくだものが二つ
 ぶらさげられているのですよ

いまか、いつか、帰ってくるひとらに
 押入れの、ずつときばんだふすま
 冷蔵庫の白かったドア
 風呂場へ通じるはずだった日曜大工の扉をあけるたび
 こんにはを
 あかるい呪文のように

おそろおそろ
 なんどもつぶやいて
 つかのま、いそろうする(なんどめかの)
 暑い旅のとちゅうの、路地のすずしい時間
 庭の松の木や、ゆずやきんかん、つばきの木がおそろくは
 たのしかつたわたしたちを見知ってくれているので
 「ここを(たぶん)おぼえている」と
 やがて思えるでしょう

そうはいつても、はずからたてた
 Animitas (あにみたす) — 魂たち、とよばれる
 あしたの祠にいます
 路傍の無名の祈念碑とかわらない
 うつすらところぼそい平穩のなかで
 わたしたちのもういらない歓声やささやきは
 おりたまれて
 きちんとひきだしにしまわれたから
 ひらかれた記憶の川にながされ
 とまおりはこの家の窓ガラスをたたき
 風鈴もゆらします

ここにいたのは、だあれ
 ここにいたのは、だあれ
 旅のとちゅうの、つかのまの、いそろうする時間

◆Para ver que todo se ha ido, / par aver los huecos y los vestidos, /
 I llame tu guante de luna, / tu otro guante de herba, / amor mio!
 If you wa to to see that nothing is left, / see the emptied spaces
 and the clothes, / give me your lunar glove, / your other glove of
 grass, my love!!
 すべてが過ぎたことを知るために／空虚と衣裳を眺めるために／
 ぼくに渡してくれ きみの月の手袋を…
 (Federico Garcia Lorca, "Nocturno del hueco" ["Nocturne of
 Emptied Space". Tr. Greg Simon & Steven F. White])
 フェデリコ・ガルシア・ロルカ「空虚のノクターン」(鼓直訳)

第19回ルカ詩祭・朗読詩

◆のなら

大橋愛由等

つかの間のいそろうるうの時間に
 風の道が閉ざされてしまえば

縁側の
 午後一時までの
 〈ぼく・たち〉の
 たゆたいの
 ゆだねのさなかの
 あまりの
 寡黙すぎる
 くつろぎ
 なんて

不在の
 詩人の
 自愛の
 淋しさの
 はてのない
 滂沱とした
 かたこと
 どの紙片 どのペエジに
 書きしるそうと
 〈ぼく・たち〉
 いや
 〈ぼく〉は
 奈辺にも
 かしこにも
 もぬけ
 であるのか
 タブララサを白く塗りこめ
 白くだ

ゆつくり なんども くりかえし
 厚く白く 無漏なく白く
 それは
 みちしるべのない山道の
 容赦のない
 樹木たちの
 夏の 夏の 噛い
 のただなかの
 あゝの風 かの風の
 〈ぼく・たち〉の
 解体の
 そよぎの
 たちくらみ

風向計は
 〈ぼく・たち〉を
 計測しようとせず
 つまずきを
 ためらいを
 たちすくみを
 採み手の汗を
 ペエジをめぐる葉指
 棄てられた詩集
 きこのうの悔悟
 きこのうのいつくしみ
 きこのうのパサージュ
 ああなんて
 すてきな眩暈
 すてきな幻惑
 すてきな絶望

夾竹桃が誘う
 ひそかに
 右の道に折れるには
 樹木たちを
 雑木だと
 雑草たちを
 雑草だと
 おまえたちの

海風への返答は
 雑駁にすぎぬ
 と言いつち
 そのあと
 黙してしまふ
 〈ぼく〉の
 横顔の
 しめされた
 シーニユの
 ありかの
 立ち折れた
 すがた

折り合いをつけるため
 左の扉の前に寄り
 ドアノブを回すまえ
 かわたれのあらがい を棄て
 昼すぎの花の首 をなぶり
 午睡の前の月光が 唸りはじめ
 荒ぶる庭の 七色の綾
 おりいぶ畑の
 葉裏にひそむ
 民話の
 さざめきの
 語り合いの中の
 悦びの
 ひとつひとつに
 プレリアの
 高揚の
 やるせない
 ひとつずつ
 わかれて在る
 夏の蔭

おりいぶ畑から
 の歩行者は
 うつむき はにかみ
 この季、この地に
 還つてきては

いけない
 〈ぼく・たち〉ではない
 くせ毛の
 留守を
 こぼみ
 語られることを
 異和とせず
 路傍の石に
 オードをささげ
 朝風に道をゆずり
 ヤマウズラのひとりごちに
 振りなをうち
 双魚の
 エスカベツチエを食べ忘れずに
 かるく
 ヴィノ・デ・ヘレスを口に
 ふくみ
 歌い始めては
 蜘蛛たちと
 笑いあふ
 うるわしき午後をすこして
 いればいいのに
 そのひと
 還つてきてしまった
 そう、あなた、ロルカ
 ガルシア・フェデリコ・ロルカ
 この季、この地に
 戻つてきては

あるがままの 乾き
 あるがままの 破風
 あるがままの 破裂
 が あなたと ロルカと
 隣り合わせ
 あるがままの 乾き は
 あるがままの 萎れ が
 あるがままの 腐れ が
 さらもうすぐ
 おりいぶ畑から

◆ 帰還詠 ②

岩脇リーベル豊美

希臘珈琲の入れ方恋し駅の途中
 邪宗には入信せぬと歪む南瓜の顔
 シンデレラが七人いても南瓜走る
 ブレーメンの音楽家なら驢馬になりたし
 失恋上等昔日のひと小春に翳り

鳥影に舞い戻る朝の漁師と甲殻類
 豚の浅瀬ら抜き言葉の食欲あり
 月と飛ぶ砂漠の上空ハミング洩れ
 伊勢弁と三川越ゆる白百合赤百合
 橋渡る夕風の河口や深潭へ
 無言歌集死んでもいいかマリア像
 君の没落命はじんわり説教になる
 秋雨の延命治療はこりごり柑橘系
 退路断つ青蜜柑つぎは奇蹟の実
 禁断の果実と知り誕生石は柘榴
 表参道コロンバンおひとりさま隅に楓

◆ 戯長歌

野口裕

景すでに
 空にはラドン地にゴジラ
 旋毛を起こすモスラから
 延々続く火事煙
 赤に潜むは濃紫
 赤銅薄く緑の炎
 ×と重ねる放射線
 怒り納まる様子なし
 反撃試す射撃とて
 なだめる力さえもなく
 途切れ途切れの点描に
 遠く霞んでしまうなり
 眼球趨る血の輝に
 ゴジラの鼓動漲つて
 ラドンモスラの小さな眼
 黒曜石の煌めきを
 時に放って滑空と
 羽ばたきさらに続けたり

人の造った塔やビル
 まともに立つはどれもなく
 くの字への字に折れ曲がり
 人々見れば壺底の
 蟻さながらに奔めいて
 出鱈目の渦作る中
 たったひとりが手を合わせ
 ゴジラ拌むは陸橋の
 半ば溶けたる端にあり
 丸く曲げたる背を見れば
 姥捨て山を降りてきた
 猫を被った老嫗
 嘆きを低く誦すうちに
 咆吼絶叫ただ中の
 一匙の灰汁掬うのが
 己が勤めと知りたるか
 しかし浄化の間に合わず
 夥しくも屍を重ね
 そこに振りまく誦経の音
 よく聞くものは蟻でなく
 咆吼したる三頭の
 大きな耳の穴なるか
 結果は知らずひたすらに
 媼の漏らす息の根は
 ひとまず続く地獄図の
 源流ここに滾々と湧く

◆サンタの顔

北岡武司

子供らよ

夕食をよるこんでくれてありがとう。

あなたたちを星空のしたに送りだしたあと
サンタさんはかなしくなります。

きれいな目は仮面の奥をみぬぎ

「それでいいのか」とわたしにたずねます。
だれもない家にかえれと

見おくるわたしは鬼のよう。

まずしい夕食をともにし歌をうたい 絵本を読み
生き生きとした目の輝きをよるこんだあとで
ここはあなたたちの家ではない と
追いだすことをどうかゆるしておくれ。

ああ それでも星のような目が
輝く顔をのぞき みんなで声をあげて笑いました。
絵本を読んで どきどきはらはらできました。
瞳のひとつひとつに笑顔がうつておりました。

このよろこびのゆえに感謝しあつてわかれました。
どうか今夜は家に帰つてください。
また来週 いっしょにご飯をたべましょう。
来週 あなたたちに会えるから

わたしもくらししていきます。

◆ふき

中嶋 康雄

子どもたちはチャンバラごっここの戦場に

ふきの群生する場所を選んだ

ふきはこのあたりでは通常見かけることはない

わざわざ日光の直射しない場所を選んで

入念な植生の維持が図られたのであろう

子どもたちの運動靴と

プラスチックの刀や丸めた新聞の槍が

やわらかなふきの群生を蹴散らした

おばあちゃんは涙を流した

その年ふきの醤油煮は食卓に上がらなかった

子どもの顔ほどもある水色の蛾は

ふきの群生近くの土塀に

毎年一度だけ一匹だけ見ることができた

恐ろしくて近づくこともできず

遠回りして出かけた

大叔父は外交官だったが

不本意な死に方をした

その大叔父が蛾になって家の様子を

そつと見に来るのだと

大伯母が悲しそうに顔を歪めた

大伯母はたいへんな美人だったが

晩年リユーマチに苦しんだ

大伯母が亡くなったとき

やつと解放された遺体をみて

おばあちゃんほつと息を吐いて焼香を済ませた

おばあちゃんはそつと

おもちゃ箱の横にたてかけてあつた

プラスチックの刀を燃やした

黒々とした煙が離れを襲い

おじいさんが激怒した

それから彼は仏前の読経をしなくなった

あまりにも化学的な臭いを嗅いで

仏さまは仏さまで

自分は自分だと思ふようになったのだ

と日記に書いた

ふきはその次の年

なにごともしなかつたかのように

例年通り生えた

空を見上げると

赤とんぼが飛行機雲に食べられていた

飛行機雲は夕方ときどき見たが

飛行機は見ることがなかつた

戦時中

市内に飛行場があつた

そこは海軍の訓練に使われ

訓練を終えた飛行兵が旅立つていった

赤とんぼは酒の肴に

ちようどよい色合いだった

ふきはその大きな葉つばで羽ばたけば

飛べるかもしれない

おばあちゃんが亡くなり

ふきはだんだん少なくなった

ペットボトルで汲んだ水道水を

ドボドボとふきの頭にふりかけた

ふきは乾いた空を見上げた

ペットボトルの底に

白いカルキがうつすらと溜まっていた

ふきは摘まれなくなった

ふきをわざわざ料理する人も

ふきをわざわざ食べる人も

いなくなったのだ

ふきは乾いた空を見上げた

◆予告

中嶋 康雄

連続する消しゴムの誘惑は

晩秋の羊歯のように揺れている

葉の裏には目が密集し

どの目もあなたを見ている

缶コーヒーを飲んでいると

急に鉄の味がして

舌が痺れる

痺れる舌でなにかを言いたくなって

錆びついた魔法の言葉を唱えてみる

空中を所在なげに浮遊する魔法が

低温の蚊みたいにフラフラと

地面に舞い落ちる

フェスティバルが開かれている

毎年開かれ今年も開かれている

今年は市役所に脅迫の手紙が届いたそうだ

カレーが売られ

うどんが売られ

ビールが売られる

鶏肉が焼かれる

小さい子どもが煙に咽びながら

温くなったうどんを

手づかみで口に入れる

まりの歴史が紙芝居で語られている

紙芝居がつむじ風に飛ばされてしまう

雨が降ってくる

毒ガスが混じっていると

予告されている

警察のテントがマスコットを配っている

黒い百足がゾロゾロとおでんの中に這い込む

百足はコンニャクになった

口に運ばれている

雨になが混じっているのかは

終わったあとにわかるかもしれない

わからないかもしれない

新聞記者が退屈そうに取材している

メインステージでは子どものダンサーが

百足を踏み潰している

もうすぐ終わる

売られる商品が安くなる

安さに釣られて買ってしまふ

羊歯が枯れる頃合いに

なにかもが片付けられる

◆ひさしぶりに百を切った晴れの日

中堂けいこ

ブナの木の金色をかきわけボールを探す。たぶんこの辺りよ、ひとりごちながらブナとブキヤナン、ブナとブキヤナン。ブキヤナンはブナで金色のお金持ちか推理作家か大統領か殺されなかったギャツビーの友達だったかで、桃色のわたしのボールは忘れ去られる。三番ウッドの調子が上がらないままパーフェクトを乗り切れず、とうとうOBにしてしまった。二打罰よ！ うしろで憎々しげにメリーがつぶやく。同伴のプレーヤーはギツチョコでわたしは遠い鏡に見られている気分なのだ、ブキヤナン。秋の七竈はとうとうに燃え上がり、その炎にむかってわたしたちはショットを打つ。手で握って投げたほうがよっぽど確かなのだ、ブキヤナン！ 妻の名が思いだせない。花の名前よきつと。メリーとわたしと左手の男はブナの金色のいつか来た道をまたくりかえしこの道を歩いている。

ゴルフはわかりきっている。クラブを振りきり、振った数とボールの数とわたしの性格がわかってしまう。顎を引いて脇をしめて背筋のぼして腰をいれてバックにゆつくり上げて、ボールから眼を逸らすな、振りおろせ。左足に乗りながら膝を止める。わかりきっている。だから桃色のボールは見つけやすい。ブナブキヤナンとくりかえす。枯れ落ち葉をふみしめ冬芝をふみしめ、ティフトンは嫌いだティフトンは嫌いだとくりかえす。ヘッドが粘って振りぬけやしない。腕からクラブがもって行かれそうになる。どこだ、道はどこだ、桃色のボールを敷き詰めた明るい道をさがしている。

◆しだく

大橋愛由等

シカクに帰りたいわたし

タイルのちよつとした隙間に芽生えたミドリを踏む。なにも起こらない。もう一度ふむ。ミドリはそこにある。わたしはなにを確かめたいのか分からないまま今度はじつくり踏みしだく。賢人はこんなときどうするのだろう。空を見上げる。モノトーンである。空を踏むことはできるのか。買ったばかりの鳥打帽をかぶり直す。ミドリはなにもこたえない。

嫌われ者の風が一軒ずつ雨戸をこつきながら去っていく。シカクから漏れ出たシカクが廊下を曲がろうとしている。その先には大きな窓があつて、窓からながめた真実だけを記述する詩人がいることはおそらくシカクは知らないだろうと、たかをくくる。詩人は今日も窓枠が世界の全きであることを信じて疑わず、片時も紙と鉛筆をはなさず携帯している。

カラスがわたしのシカクの音色を真似しようと今朝もやってきている。「どうだ、シカクになれないだろう」と言っているのに違いない。それよりも頑なにしゃべろうとしない花崗岩が気になるわたしは不機嫌を装ってダリのカラージュが載った「VOUGE」誌をめくる。仕草をする。シカクが廊下の隅で溜まっていく。どうしたらいいのだろう。

そういえばへ雑魚が楽しそうに死んでいると印字された広告チラシを捜していたのは秋が深まった頃だったか。雑魚も寝不足だったのだろうか、シカクはきつと同情しないだろう。潮騒の聴こえない港町に住んでいるわたしは踏みしだいたミドリを今日も視ている。シカクが置いていった鈍色の雑記帳を日記帳にしてシカクに帰る手立てをかかんがえている。

◆影や暗闇や…そんなん ばっかり

福田知子

ロルカをイモ兄ちゃんと呼んだら叱られるかな：
フェデリコ＝ガルシア＝ロルカ
彼の創った学生劇団「バラッカ」
マドリッド近郊での公演フィルム
暗幕のような黒いマント
透けた黒いマントを着て。
フィルムはまわる
ぼつそり 息遣い
黒いマントの 微かな息遣い
黒いマントに 息をこらして
顔は覆われ判別できないが
闇そのもの の
精神そのもの の
透けた黒いマントを着て。

あかつき時のジプシーや露台バルコニや古い民謡やソレア*
でこぼこのロルカ 夜明けのロルカ
流れ込む闇の全体
黒いマントで等身大を覆い隠すロルカ
：そうね「バラッカ」が小屋掛けしたカルデロンの宗
教劇「人生は夢」
〈影〉や〈暗闇〉や〈光〉や〈時間〉や
〈分別〉や〈力〉や〈知恵〉や〈意識〉：
登場人物は抽象概念ばかり

◆べっしよ。べっ。しよ。

高谷和幸

振り返ることがなくなれる鉄橋を見送っ
ている。振り返って見ているのは「ふかん」
の鳥だ。「べっしよ。べっ。しよ。」という、
中空に浮かんでいる色が「かぜの正体であ
る」と彼は聞いているのだろうか。「ひかり
の熱」に焚かれて、分光器からにじみ出てく
る「ひめじべっしよ」という駅駅がある。ここ
はあなたが落ちたこえつぽという名指しえ
ぬ場所ですと、姉（シフター）たちがいつの
まにかつり革に集まってきている。堅い歯
を噛みしめるような地層の、縦穴の「ニルバ
ナ」の液晶にこどもの躰（ひみつ）が陥落し
て、「あなたのニルバナ」をさまよったこと
があった。金鉱石にべつとり汚れた右手の
手袋。姉（シフター）たちが指で示すそのさ
きで（姉《シフター》たちの右手の手袋の観
測が始まったあの時点から）、「べっしよ。べ
つ、しよ。」この場所にけっして振り返るこ
とができない星雲のエンタングメントの手
袋のかたわれが残されている。つり革を握
りしめた、左手の手袋の「宇宙の塵」がさか
んににおつてくる。

面白いね：
ゴースケさんは言った。

そういえば
抽象概念ばかりで：
わたしやわたしたちのしつてるロルカ
フェデリコ＝ガルシア＝ロルカ

フランコ將軍率いるファシストに殺された
故郷のグラナダで自ら墓穴を掘られ銃殺され埋め
られた
幾人かの女とそれより多くの幾人かの男を愛し殺さ
れた
政治的ではなかったのに殺された
芸術を愛したりベラルな男は殺された
悲劇的な死 天逝の詩人
ロルカはそんな抽象概念で埋めつくされている
だが
ロルカは黒いマントを着て。

*カンテ・ホンドの一種でシギリヤから派生した一
形式。悲しみと孤独の感情をうたう。

◆ビスナール

福田知子

訪れてみよ
訪れてみよ

山沿いの石垣の家は土壁り下が崩れて
そのう間を山から下りてくる清水が
かすかに響くのがきこえた

海のなかの山 山のなかの海がまじわる半
島の
波がきて 帰り波とぶつかるところに

信号ひとつの町があつて
広い谷間に新建材の住宅がいつぱいだつた
わたしが そこから出発するなんてありえ
ない
あれは もう七十数年前のはなしだし
石垣には蛇も住んでいたし
海辺でイルカが柄の長い刃物で切り裂かれ
波が血で真っ赤に染まっていた
舟屋の壁に掛けたマニラロープが
きつく におつていた

きょうの空は真つ青で
とおく ぼんやりと フジヤマがかすんで
いる
他国の小路で

ビスナールの丘陵地帯
砂漠の丘陵地帯

オリーブの木々は叫び声の実をいつぱいにつけている*
オリーブの木が乾いた土塊を遮る
荒涼とした原野
人間も植物も木乃伊になる禿山
石灰岩が突き出た禿山
オリーブの木のもと
穴を掘るよう命じられて掘り

銃殺されたロルカの死体には石灰が撒かれていたと
いう
その窪地には今も生の花を手向ける誰かがいて――
途中で誰にも会わなかったのに
生の花が数本ばかり
まだ枯れていない
まばらな林の中の岩には殺された知識人たちの
プレートが数枚張り付けられていた
少し離れてロルカのプレート

その空の下はるか
風は死の衣を纏う
F・G・L

「予兆―愛」という『カンテ・ホンドの詩』からの一節

骨が見つからないから
殺された彼らの墓標はない
捕らえられた鳥たちは長すぎる尾を
暗闇の中で動かさずつづけている

*「風景」(フェデリコ＝ガルシア＝ロルカ『カンテ・
ホンドの詩』より)

他人の ような じぶんが立っている

あるいは 歩いている
いまや老年のわたしの あれは
透きとおつた影だろう
道ばたの溝に躓いているよ

そうだな 知らないわたしだな
見知らぬわたしで いつぱいだな

生魚の切り身をむさぼつて
明日はまた突端の
海からいうと へっこんだ町から出て行く
予定だ
予定は もう未定ではなくて

まもなく
海でも空でもないところへ向かって
この身を向けることになるはず
古い石碑に消えかけた文字のさまで
ところで いま 夕焼けの下で
空つぽのわたしが 突っ立っているのが
とおくに見える

思いがけない
瞬時に起こったことだつた
漂着した船乗りみたいな
空飛ぶ円盤みたいな

◆ 一日の理由 (ルバイヤート風)

大西隆志

1
手のひらにのせる一枚の紙
東西南北の方位の闇を読み
あるものと、ないものと始まりの一点の実
崩れる手の上の風と海の意味

3
手をさしだすのは正しい道なのか
迷える小径に続くのは朝日、夕日の坂
たくさんの生き死に葡萄酒の詩歌
恥じらいをつつみこむか、両手の優雅

5
山の食事、森の食事に付き合う
美味しいのは湧き上がる雲、湿気ではなく光
の蝶
あちら、こちらのビルディングの屋上に米
粒が漂う
メメント・モリが蓋う

2
水が落ちてくる、したしたした音を従え
扉の向こうへ、永遠の匣におさめた絵
味わいが去った舌には年齢をかさねた声
川を渡る準備と崩れ落ちるのは家

4
歩きながら風景を切り取り
アルバムに貼り付けるのは懐疑を宿す鳥
高い空から一直線に、水面に罅を刻む塵
大音響は宇宙の彼方から降りて来て、地表
に設置される檻

6
焼き落ちる集落、養生する五穀
折り合いながら、狩る日々の句
林檎の円盤の柵に、渦巻きの柵
築かれた塀の表情に沿って行く

◆ 城

富哲世

なんとか惨めさに堪えうるだけの悲惨さをくぐり
抜けてなお
新しい欲情がほしいときにはまず中庭を訪れると
よい
開け放たれたままの門をくひよろくひよると無心
にくぐり落ち行くままに
肝臓の荒地を登る閉じた岩をこれみよがしにま
わり
エサのかわりに「開けゴマ！」
すでに正邪の鍋に尽くされた野太い知己の高笑い
をかき消し
瓢箪や山羊の皮袋に詰める
砂埃を浴びた臆病そうな靴音も集まってくるのを
待って
聞こえないつもりでもちゃんと聴こえているんだと
永遠の氷山に向かって垂れる審判の声を
廊下の水際の立ち話が立ち喝れるまで
抗がん剤の濃度を高めるモザイクを眺めるみたい
に知らんふりで聴いてやるんだ。
娘を連れられた私の仕事はガラス壁のこちら側で冷え
た目を持ち小さな掌を握ったまま
鯛のうろこを剥ぐように順調であると言える。
死んだ者たちはみんな
青く顔を塗られて

ある者は仰向けに横たわり
ある者は大理石のテーブルに就いて
アラバスタの空壺を転がし
何かを求めるようにあんぐりと口を開いて
生前と瓜二つの姿かたちで空転していながら
どこから見ても奇妙としかいいようのない珍妙な
様を提していた。
縮を上げしく呑み込みながら
空中プランコのように円天井を吹き抜ける山嵐の
濁音に混じって
煽り窓がしきりに軋むのが聞こえ
窓辺へと寄せる見えない手の騷擾に混じって
何者かの剽窃の叫び声が長い尾を引いて響き渡ると
羽ばたいては墜落する声の伽藍は
たちまち荒波に採まれた蒼白な餌食の傾ぐ船倉と
なり
哀歌をまみえながら珊瑚の松明をふところに抱き
「暗闇の朝課」のさなか、影の僧らが黒ずくめで練
り歩く荒れた波の岩山をめぐる典札のさなか
黄金色の枯れ木の股に挟まれたいわくありげな草
のトランクの浮沈を幻影させながら
これら幾人かの死人を凍りつかせたように一場の
情景に取り残したまま
皆はその気がかりの故に死後の戦のように静まり
かえっていた。
犯人とおぼしき鼠の旗か
白雪姫が運んで来た咽頭の門の開いた金魚玉のな
かには
いつせいに顔を背けなくなるほど
生を誇張された魚が泳ぎまわっていたが
生きるという届かないゼスチュアをこれ見よがし
に振り撒く
思い出もろとも遠ざかつては近づいてくる

ときに後ずさつては這い寄ってくる幸せを煮詰め
る虎
あるいは炭鉱のカナリアのように
それは兆しを見詰めるなららかのしるし
時の染みなのだろうか。
彼らはそれらが苦手なのだ(と思う。)
試しにその透き通ったうすみどりのフリルの金魚
玉は誰がここへと運んで来たと思う
そう尋ねたとすれば
しどろもどろに答えるだろう。
おれたちは
いのちというものをもうすっかり忘れ果てしま
っているわけではなく、
たとえ他人事のようにうすばんやりとしてしまっ
ているからとは言え
何か知らないものもしくは無いものを眺め遣るぐ
らいには馴れ親しむことのできない気持ちの悪
さを味わわせるものなのだ、と。
壊れた門をくぐり
たどり着くように砂漠のような中庭をめぐる
枯れ果てた思い出以外きょう一日と呼べるような
なにかがここにはまだあるのだろうか
きょうと呼べるきょうがあつたのだろうか
脱け殻となつて月日にさらされた城か
あるいはいつまでも退かない水に
数千の部屋を持つさよならの方舟が水底にずるず
ると錨を引きずりながらさ迷い続けているだけ
なのか
せめてこの長々と終わりの見えない倦怠なつづき
一場の疲労か
由ってくる出自を覆す理由が
灯りの乏しいわれわれの居間に現れないものであ
ろうか。

うた 神戸詞あしび

107-2016.11.20 大橋愛由等



駅でみたおじさん

名、神戸市の地名』であった。発行元はいまはもうない神戸新報社。週刊で発行する業界新聞を出しながら出版活動をしてきた小さな会社であ

夢とうつつの区分 溶解している不安

る真鍮製の活字を持って印刷所が少なくなり、写真植字による活字が書籍印刷の主流をなすにいたった。▼時代はさらに変わり、写真植字からDTPの時代へと移行する。このデスク・トップ。パブリシテイは、パソコンなくしては普及しないものだった。かつては植字工がしていた仕事を、編集者や、組版の外注者がパソコンで手がけるようになって、植字工や写真植字に携わっていた実務者も仕事がなくなくなってしまったのである。反対に、いまでは編集者が印刷所に提出する書籍データを作り上げるまでの作業を担うことになり、多忙さはより増しているのである。▼私の睡眠不足はまだ続きそうだ。夢に取り込まれてすぐ日々を送るうち、やがてやってくる冬。寒がりな私は猫背になりながら、季節のうつろいをぼんやりと感受していることだろう。

▼秋になって、睡眠不足がつづいている。寝るとすぐに夢をみる。「みる」というより、夢の住人となり、夢に取り込まれていくのである。夢の世界がひとつのリリティをもち、夢に魂を吸い取れられてしまっている。これもやはり精神が不安定な証拠だろう。▼「カフェ・エクリ」に参加していたときのことである。会場はたつの市のガレリア。二階の和室で読書会をしていたとき。わたしの発言の順となつて語っていると、おもわず「あつ」と叫んでしまった。会場の窓の向こうは揖保川。その上空を渡り鳥が飛んでいたのだ。「雁かしら」と詩友の言葉が云う。神戸という都会に住んでいると、揖保川のような水量のゆたかな河川は珍しいし、さらに加えて渡り鳥の群れを見ることがほとんどない。さすがに豊かな自然をたたえた龍野である。渡り鳥をこの眼で確かに捉えたのは、初めてかもしれない。彼らはこれから長旅に出る。なを見、そしてどこへ飛んで行くのだろうか。▼その「カフェ・エクリ」の読書会で発表したのは、在野の研究

者・岡田功氏。地名について熱く語ってくれた。彼が地名研究をはじめた時出合った人が落合重信氏である。わたしが大学を出て一番最初に出版を手掛けたのがこの落合氏の『地名に見る生活史』兵庫県の地名、神戸市の地名』であった。発行元はいまはもうない神戸新報社。週刊で発行する業界新聞を出しながら出版活動をしてきた小さな会社であ

る。そこで何冊かの本の出版を編集担当した。▼落合氏の本は、神戸新報に連載していた記事を一冊にまとめたもので、当時氏が勤務していた神戸市立中央図書館に時々原稿をいただきに参上していた。会えば、当時まだ二〇歳代だった若造である私にも隔たりなくさまざまな話を語ってもらい貴重な時間を過ごした。氏は歌人でもあり、かつて自由律短歌の作品もあるというの、あとで知ったことである(夫人も歌人)。その当時はまだ表現活動をしていなかった私だったので、もう少し自由律短歌について聴いておけばよかったと今では残念に思っている。▼『地名に見る生活史』は当時では珍しかったオフセット印刷で刷りあげた。一九八〇年代前半はちょうど印刷業界の転換期にあつた。一字ずつ字をひろつていく活版印刷から写真植字に移行しようとしていた。しかし活版の持っている文字の「肌触り」に愛着を持つている著者は多くいて、その要望にこたえて何冊か活版で本を作った記憶がある。しかしやがて淘汰は進み、活版の鉛のもとには

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.118
神戸

2016年11月20日 通巻118号
発行所/月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人/大橋愛由等(「Mélange」同人)
maroad66454@gmail.com
定価 600円(税別)